

途上国アルバム： Bangladesh

川野 亮

Project Formulation Adviser

JICA Bangladesh事務所 在ダッカ

あけましておめでとうございます。2021年9月から丸一年以上、ダッカにて運輸・交通セクターの担当者として勤務しております。赴任以来ずっと、コロナ禍及びセキュリティ面での行動制限が併存したことで、会食の禁止、自家用車以外での移動の禁止、夜間の行動制限、国内旅行の禁止といった、ナイナイづくしの日々が続いておりました。しかし、念願だったこれら制限の緩和がつい先日より開始され、自分の足で街中を歩いて回れる感動にまさに浸ることが出来るようになりました。まだまだ名所や史跡の多くを訪れることが出来ておらず、私が生活を送る首都ダッカと出張で訪れた地方都市で撮影したスナップショットが中心となってしまいますが、未だ更新が止まっている当地旅行者向け「地球の歩き方」を本号では少しでも代替出来れば幸いです。

ダッカ

皆さんが Bangladesh と聞いて最初に思い浮かべるものはなんのでしょうか。やはり喧騒や人いきれ凄まじい、熱気と活気に溢れた多くの人々、大きな人口ではないでしょうか。実は Bangladesh は、日本よりも大きな1億6,000万人超の人口を誇ります。しかし、そんな巨大な人口に対して国土面積は日本の約40%程度に過ぎず、人口密度は世界第7位です（2022年 PopulationPyramid.net 調べ）。どこに行っても人がいますし、大抵多くいます。そんな人口密集度を一番に体現する首都ダッカでは、途切れることがない車両の交通渋滞が慢性的な悩みの種です（写真1）。それゆえ、ダッカでは、間隙を縫って走る人力車（Rickshaw）が大いに重宝されています（写真2）。また、大通りから裏道に一步入って、チャイ屋台（Chadokan）とスナック屋台（Nasta）で一息を入れるのもダッカ流です（写真3、4）。



写真1 市内の込み合う交差点



写真2 Rickshaw



写真3 Chadokan



写真4 Nasta

観光地

冒頭で弁解させて頂いた通り、観光地らしいメジャーな場所は正直回れておりませんが、幾つかマニアックな場所をご紹介します。まずご紹介するのは、世界一長い海岸線を持つコックスバザールです。バングラデシュの一大リゾート地で、綺麗で静かな浜辺もありますが、夏でも泳いでいる人は皆無で、皆波打ち際で佇んで過ごしています（写真 5）。目を引くアトラクションはありませんが、都会の喧騒を忘れてくつろぐには最適です。私のお薦めの宿泊先は Sayman Beach Resort です。夕日を眺めながらシーフード BBQ とビールを楽しめます（写真 6）。次にご紹介するのが、ダッカ動物園です。ここでは絶滅危惧種のベンガルタイガーを十数頭観ることができます（写真 7）。ダッカ日本商工会はベンガルタイガーをモチーフとしたゆるキャラ「ばんトラくん」を世に送り出しています（写真 8）。ちなみに、園内には野生なのか飼育されているのか不明な猿が檻の外を走り回っているの、ベンガルタイガー以上に要注意です。そして最後にご紹介するのはラロン廟です。ベンガル地方にはバウルと呼ばれる吟遊詩人兼修行者がいるのですが、その中でも聖人と讃えられるラロンのお墓がクシュティアという地方都市にあります（写真 9）。バウルの歌は世界無形文化遺産に登録されているものの、今も各地を放浪しており数も少ないため、当地で吟遊詩人バウルの生の歌声を聴くのは極めて困難です。ご関心がある方は川内有緒著「バウルの歌を探し」を是非お読みください。



写真 5 コックスバザール
海岸



写真 6 Sayman Beach Resort
<https://sayemanresort.com/>から引用。



写真 7 ベンガルタイガー



写真 8 ばんト
らくん
<https://www.thedailyvstar.net/business/japanese-businesses-launch-mascot-bangladesh-142663>から引用。



写真 9 ラロン廟

バングラデシュの食物・料理

バングラデシュではムスリムの戒律から、一部の食品は非常に入手が難しい環境にあります。高級ホテル内のレストランを除いてお酒は置かれておらず、持ち込み可能なレストランに自分で持ち込むのが一般的です。また、豚肉の入手は特に難しく、外国人向けの肉屋で冷凍のものを調達しております（写真 10）。多くの品々を輸入に頼る一方で高関税を設けているため、外国人が通うスーパーの店頭は充実してい

ますがどれもこれも高価です (写真 11)。他方で、地元の野菜は日本ではなじみのない品種もありますが、素朴で新鮮なものを安く買い求めることができます (写真 12)。そういった野菜や地鶏、マトン、魚をふんだんに使ったカレーやキチュリ、ビリヤニが定番料理で、日本人の口にも合うように思います (写真 13)。ちなみに、こちらでは、カレーはナンではなくライスを手で混ぜて食べるのがオーソドックスなスタイルです。最後に、ご当地のお菓子はミスティと呼ばれる牛乳や砂糖でできたもので、青天井の糖度を誇ります。お酒も飲めず娯楽も少ないバングラデシュでは、お茶をしながらミスティを頬張るのが男女問わず楽しみの一つのようなようです (写真 14)。仕事で政府関係者の方々と面談するとお茶受けとして大抵出てきます。



写真 10 German Butcher の冷凍豚肉



写真 11 スーパーに並ぶ舶来物の品々



写真 12 ローカルの野菜



写真 13 家庭料理 (バン



写真 14 ミスティ
グラデシュ人同僚宅)

風物詩

イスラム教徒には年に 2 回 Eid (イード) と呼ばれる、日本で言うところのお正月にあたる祝日があります。ラマダン明け前後に催すイードを Eid-Ul-Fitr、ラマダン月から 1 カ月後に催すイードを Eid-Ul-Adha (犠牲祭) と呼ぶようです。ラマダン中の日没後の食事は、イフタールというものを仲間や友人とわいわいしながら摂ります。写真 15 は当方事務所で振舞われたもので、メインは Muri (米ポン菓子のようなもの) に玉ねぎやカレーのスパイスを混ぜたもので美味でした。もう一方の犠牲祭は、もともと羊を生贄として捧げて、その肉を近しい人と分け合う習わしとのことです。首都ダッカでは、山羊のみならず牛も“ドナドナ”よろしく運ばれて来て、道端につなぎ留められており、多くがその場でしめられてビリヤニなどに美味しく調理されます (写真 16, 17)。バングラデシュにはヒンズー教徒も多くおり、私の同僚もその一人ですが、その日は家からあまり出ないようにしているようです。



写真 15 イフタール



写真 16 犠牲祭前夜の牛達



写真 17 犠牲祭前夜の山羊達

事業地

ダッカ空港への着陸前に眼下に広がるのは、豊かな水源である大小の河川とそれらが織りなす瀉の雄大な景色です。周囲をインドとミャンマーに国境を接するバングラデシュは、メグナ、ガンジス（パドマ）、ジャムナ（ブラマプトラ）という 3 つの国際河川の氾濫原に位置し、高地がほぼ存在しない平野続きです。それらの河川は豊かな恵みをもたらす一方で、人々の交通・物流の前に立ちふさがり、人々はボートでの渡河を長らく強いられてきました（写真 18）。この国には橋梁を架けて国内の連結性を高めるニーズが大いにあります（写真 19）。そのほか、冒頭で触れた都市化に伴う交通渋滞の解消には、ダッカにてその 1 号線が昨年未に開業を果たした MRT（Mass Rapid Transit/大量高速輸送）の一層の導入も待ったなしの状況にありますし（写真 20）、高まる国の存在感に比例して増加する国際旅客需要に対して、空の玄関口であるダッカ空港の拡張も焦眉の急です（写真 21）。



写真 18 マドゥマティ（カルナ）河を渡るフェリーボート



写真 19 ジャムナ鉄道専用橋（建設中）と奥に見える既設のジャムナ多目的橋



写真 20 デポ内車庫 MRT 車両



写真 21 ダッカ国際空港・新国際ターミナル（建設中）

終わりに

バングラデシュは、コロナ禍による落ち込みはあったものの、毎年 6%を超える高い経済成長率を継続しており、同じ南アジアにあるスリランカやパキスタンが財政危機や財政破綻に瀕しているのを尻目に、昨今のドル高やインフレに伴う足元の外貨準備高不足は警戒すべきものの、同国政府の対外債務 GDP 比率は 20%台と債務持続性は健全な水準です。他方で、2026 年に見据える LDC ステータス卒業を達成すべく、各セクターでハード・ソフト両面での開発に急ピッチで取り組んでいるものの、この卒業とともに撤廃される特惠関税への対処方針は明確ではありません。今後、国内並びに隣国とのコネクティビティ向上を推進する運輸セクターなど経済インフラの開発だけでなく、FDI を促し、尚且つ RMG (Ready-made garment/既製服) に続く国内輸出産業を育てる産業多角化、関税・非関税障壁の撤廃、さらには民間企業に資金を流す金融セクターの改革が急がれています。また、冒頭のあたりで触れた巨大な人口は、人口ボーナス期にある若く豊富な労働力を提供する一方で、国土の狭さに起因する土地や天然資源などのリソース不足（例えば、道路石材は隣国から輸入することもしばしば）の問題や、今後気候変動の進行に伴う海面上昇や浸食による耕作地や居住地といった希少なリソースの減少への対応など、いかにして影響に強靱 (resilient) になって備えるかも後回しにできないテーマです。政治的には、ハシナ首相率いるアワミリーグが長期政権を樹立しており、2024 年の総選挙においても最大野党 BNP に対して圧倒的に優勢な状況にあり、人口の 9 割がムスリムであるものの、ひしめくように暮らす事情がそうさせるのか、それとも国民性なのか他の宗教に非常に寛容で、安定した社会だと思います。これらも相まってか、南アジアと東南アジアの結節点にあたり、周辺の国に比して、政治・経済リスクが相対的に低く、生産地としても市場としてもポテンシャルのあるバングラデシュには、注目が益々集まっていることをひしひしと感じています。今後もこの機会をとらまえた同国への開発協力に少しでも貢献出来ればと思います。

読んでいただき、オネク・ドンノバッド！（どうもありがとうございました！）



写真 22 MRT 車両運転席でハンドルを握る筆者